（元禄九年）八月廿二日

一五　火事番其他雜事御定

覺

一、火事番、高知取候者二人、組頭一人、十五日替二番定置、火事無之候共、風吹氣遣成時分は、打廻火之用心可申付事。

一、金澤夜廻、御小將・御馬廻之內五人、足輕十人指添、毎夜方々廻可申候。但、月夜に下々挑灯燈候儀無用之事。

一、金澤侍屋敷に而鐵炮打申事御停止候。卯辰山・犀川・淺野川之岸三ヶ所にて、廣き的場を立置稽古仕度者は、年中不依何時爲打可申事。

一、馬市如跡々可申付事。

一、御一門樣方御年忌御法事之日限、御施物等夫々に極置、從是不被仰遣候共可有執行事。

右無相違急度可被守旨御意候。以上。

（寛治元年）戌十二月朔日

今枝民部
奥村河內
本多安房
前田對馬殿
奥村因幡殿
津田玄蕃殿

一六　躍・辻相撲之儀御定

覺

一、躍・辻相撲跡々より雖爲御制禁、猶以堅く御停止之事。

一、此間於所々をどり・すまふ有之に付、御横目之もの并足輕等大勢被遣、左樣之輩可致打擲候。若手向候もの於有之は可爲討捨候。品々によりからめとり可申事。

一、をどり場に女も罷出候由に候間、とらへ被遂吟味御穿鑿、品により主人或親兄弟或女之宿主可爲曲言事。

右之通被仰出候條、急度被得其意、組中并召仕候下々迄、其主人より堅縮申付、猥夜行不仕候樣可被申渡候。以上。

寛文四年六月廿日

一七　鷹其他雜事御定

一、大鷹・隼・弟鷹・兄鷹共、三千石以下之者所持仕間敷事。

一、雀鷂・雀鷸・差隼、并天のあみ張候儀、金澤三里四方御停止之事。

一、嫁入手道具之外、葛籠・挾箱・長持・衣桁之類、蒔繪可爲無用事。

附、長持二十棹・乘物十挺之外御停止之事。

一、中陰年忌三日より長法事無用之事。

一、かけの諸勝負御停止之事。

一、かこひ女堅御停止之事。

一、踊・辻相撲御停止之事。

一、女をむかへ候もの、水あびせ候儀御停止之事。

一、家居・金銀之繪座敷、其他不應分限華麗成作事有間敷候。但仕懸候作事は格別之事。

一、上下共に刀柄・鞘かけて三尺五寸、脇指二尺五寸より長をさし申間敷候。附り、朱鞘・かいらぎ鞘・大鍔・角鍔、其外かぶきたる拵仕間敷事。

一、大撫つけ・大すりさげ・下ひげ・顎髯御停止之事。

右之條々、誰々によらず於令違犯は、隨過輕重曲言可被仰付候。此以前少之儀にも過料出候得共、向後御用捨可被成候間忝存、彌被仰出候筋目違背仕間敷之由、急度可被申觸旨御意候。以上。

萬治二年正月朔日

今枝民部
奥村河內
本多安房

一八　鐵炮打候儀御定

鐵炮打候儀、如跡々四月朔日より七月晦日迄は、居屋敷之內にて爲稽古的打申儀は御赦免被成候。但、植木にとまり候鳥、勿論あげ星・射越など無之樣に、隣に遠慮可仕候。左樣之所猥打申間敷之旨被仰出候條、被得其意、組中にも可被相觸候。恐々謹言。

萬治二年正月六日

本多安房
前田對馬
津田玄蕃
奥村因幡
小幡宮內